

関門海峡域の生活言語の状況

——関門海峡をまたぐ地域の言語地図集に注目して——

住 田 幾 子

はじめに

今、市町村合併という大きな潮流の中であって、山口県の西端部域、‘下関市と豊浦郡との合併’の可能性についての諸問題が検討されている。2002年（平成14年）10月29日、下関市と豊浦郡との接境の地に位置する梅光学院大学梅ヶ峠キャンパス内の一室に、「下関市・豊浦郡4町広域合併調査研究会資料室」が設置された。

そして、下関市域（山口県）は、北九州市域（福岡県）とも関門海峡をまたぐ一つの地域、‘関門海峡域’というまとまりをもってとらえられ、「海峡を活かしたまちづくり」もまた進行中である。北九州市の末吉興一市長は、2002年10月25日、下関市で開催された「第11回 世界地方都市十字路口会議 The 11th World “Lead-off City” Conference」の席上で、「関門海峡を一体と考え、下関市とともに『ツイン・ウオーター・フロント・シティ』づくりを行っている」と述べた。

末吉市長によると、大正14年の時点において、中野金次郎が“関門海峡をまたぐ一大行政区創設の必要性”を説き、すでに今日の下関・北九州両市の状況を予言していたということである。末吉氏によって、『海峡大観 関門海峡及北九州の対外的発展と其将来 現代語訳版』（大正14年1月 中野金次郎編集 平成7年3月現代語訳版発行）の存在を知り、この地域の生活言語に関心を持つ者にとっては、中野金次郎の卓見に、年来の課題を解く鍵を見つけたような思いがした。関門海峡は、下関・北九州の人々の行き来をつないでおり、そこに生きることばにも、その往来のすがたが表れているのだと。

関門海峡をまたぐ地域に関しては、岡野信子による方言の調査・研究がある。岡野は、関門海峡域に生きる人々の日常生活言語の状況を、長年にわたって見つけ続けてきた。本稿では、主として岡野のしごとに注目し‘関門海峡域’という地域のまとまりの様相を、方言の分布状況からつかんでみたいと考えた。

一 下関市・北九州市域の言語地図

関門海峡をまたぐ地域の方言（地域言語）の言語地図集については、つぎの三つのものがあげ

られる。

- A 『関門海峡周辺方言地図』（宮本登 1975）
- B 『山口福岡両県接地域言語地図集』（岡野信子編 1976 梅光女学院大学日本文学会方言研究ゼミナール）
- C 『下関市北九州市言語地図』（岡野信子編 1991 梅光方言研究 第8号 梅光女学院大学方言研究会）

「関門海峡周辺」、「山口福岡両県接地域」、「下関市北九州市」と、関門海峡をはさむ両地域を呼ぶ名は異なるが、いずれも関門海峡をまたぐ両地域を一つのものとしてとらえていることがわかる。

いずれも、時間と手間とをかけた労作である。自分の生まれた土地のことは、自分の生活している土地のことはすがた（音声言語）を形にして記録しておきたいという強い意志がうかがえる。時代が、社会が大きく変化する今、これらの言語地図がとらえたことをしっかりと再認識しておきたい。

以下には、次の4つの項目に分けて、「A」・「B」・「C」の言語地図を対照させながら、それぞれの特徴を見ていくことにする。

(1) 調査年月

A	1974年2月～8月（昭和49年）
B	1975年7月～8月（昭和50年）
C	1990年7月～8月（平成2年）

AとBとがほぼ同年代の調査によるもので、これにより昭和50年ごろの関門地域のことはの様子をうかがうことができる。Cは、岡野が、Bの調査で行った関門地域の海岸線部域から、さらに内陸部に調査を進めてまとめたものである。Cによって、A・Bの発行から15年後の平成2年ごろの関門地域の言語状況を見ることができる。

(2) 調査地域と調査地点数

A	山口県下関市	響灘がわは綾羅木付近まで 周防灘がわは長府付近まで	36
	福岡県北九州市	門司区・小倉北区の全域、小倉南区の北部域 戸畑区の全域、八幡東区・若松区の東部域 京都郡苅田町	150

(合計 186地点)

B	山口県下関市	関門海峡・響灘・周防灘の沿岸域	12
	山口県豊浦郡	豊浦町・豊北町の沿岸域・角島	9
	山口県厚狭郡	山陽町の沿岸域	2
	福岡県北九州市	門司区・小倉北区・小倉南区の沿岸域 戸畑区・八幡東区・八幡西区・若松区の沿岸域	15
	福岡県京都郡	苅田町の沿岸域	2
福岡県遠賀郡	芦屋町・岡垣町の沿岸域	3	

(合計 43 地点)

C	山口県下関市	全域	30
	福岡県北九州市	門司区・小倉北区・小倉南区の全域 戸畑区・八幡東区・八幡西区・若松区の全域	30

(合計 60 地点)

関門海峡をまたぐこの地域は、旧国名では「長門国」・「豊前国」・「筑前国」に属していて、こ
こは、三つの国の接境地帯ともなっている。

<長門>……下関市・豊浦郡（豊浦町・豊北町）・厚狭郡山陽町

<豊前>……北九州市の門司区・小倉北区・小倉南区

京都郡苅田町

<筑前>……北九州市の戸畑区・八幡東区・八幡西区・若松区

遠賀郡芦屋町・岡垣町

関門海峡の北の地域、山口県がわは「長門」域である。言語地図上は、「響灘がわ」と「周防
灘がわ」という見方をしていく。下関市は、明治 22 年に「赤間関市制施行」となり、後の、明治
35 年に「下関市」と改称された。（『下関市史・年表篇』 昭和 53 年 下関市市史編集委員会）

豊浦郡・厚狭郡については、明治 11 年、『郡区町村編成法』公布により、旧長門国区域に厚
狭・豊浦・美祢・大津・阿武・見島の六郡と別に赤間関区が置かれる」とある。（『目で見る下
関・豊浦の 100 年 下関市・豊浦郡』 1998 年 清水唯夫監修 郷土出版社）同書の「刊行にあ
たって」には、下関市・豊浦郡について、

一般に、「豊関地区」と呼ばれ、藩政時代から、今日まで下関市を中核都市とする広域行
政圏を形成している。

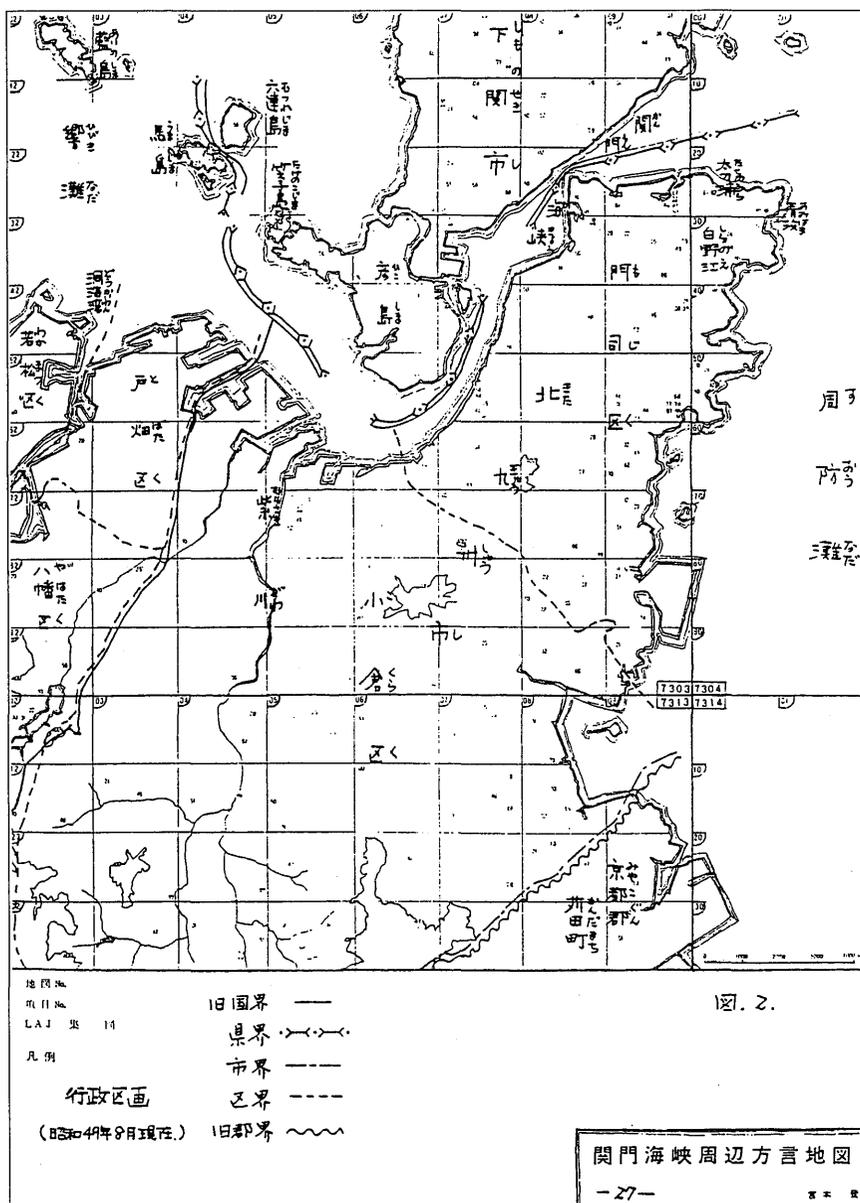
とある。

関門海峡の南、福岡県がわの北九州市域は、「豊前」域と「筑前」域との両方からなっている。
北九州市は、1963 年（昭和 38 年）2 月 10 日に発足した。門司市・小倉市・戸畑市・八幡市・
若松市の五市が合併しての、「広域自治」をめざした「作られた都市」である。（『北九州市年表』
「まえがき 谷 伍平」による 北九州市 昭和 48 年 2 月 10 日）その後、1974 年（昭和 49 年）

4月1日に、行政区が再編成された。小倉区が小倉北区・小倉南区の2区に分かれ、八幡区が八幡東区・八幡西区の2区に分かれて、門司区・戸畑区・若松区を合わせての7区制となった。
 (『北九州市年表2』北九州市 昭和53年2月10日)

調査地域については、「A」が、文字通り、関門海峡域を、「関門海峡」の両岸とそこに接する周辺の地域と見ている。調査地域は[B][C]より狭いが、調査地点数は186地点にもものぼり、密度が濃い。(地図I 参照)

地図I



「B」は、「関門海峡」をはさむ両地域を下関市・豊浦郡・厚狭郡まで、北九州市・京都郡・遠賀郡までと、広くとらえている。

「C」は、「B」の調査で成しえなかった内陸部の調査を完成させるため、「関門海峡」をまたぐ地域としては、「B」よりも狭くして、下関市・北九州市域内のみ限定した範囲となっている。

(3) 調査対象者（年層と性別）

調査にあたっての方言の教示者については、年層・性別・人数において、次の表のとおりとなっている。

A	50歳以上		男性 106名	女性 80名
B	60代後半～70代	〈老年者〉	—	女性 43名
	中学2年生	〈少年者〉	—	女性 63名
C	70歳前後	〈老年層〉	—	女性 70名
	高校生	〈青年層〉	—	女性 85名

岡野は、ことばの変化の過程をとらえるために、「B」・「C」ともに、「老年者」（「B」）・「老年層」（「C」）と、「少年者」（「B」）・「青年層」（「C」）という二つの年層に分けて聞きとりを行っている。

(4) 調査項目と調査項目数

この稿では、調査項目の内容については詳しく見ていくことはできないが、調査項目と調査項目数とを対照させておく。

	調査項目			項目数合計
A	学区・買物圏・婚姻圏など、非言語的なもの（8）		語詞（86）	94
B	音声（10）	文法・表現法（44）	語詞（59）	113
C	音声（9）	文法・表現法（47）	語詞（44）	100

二 関門海峡をはさむ両地域における方言事象分布の様相

上記の三つの言語地図の中で、『山口福岡両県接地域言語地図集』の調査地域が、山口県がわでは下関市と豊浦郡・厚狭郡を含み、福岡県がわでは北九州市と京都郡・遠賀郡を含み、その範囲が最も広い。これをもとにして、一つの‘関門海峡域’という地域のまとまりを見るために、岡野のしごとをたどってみたい。

『山口福岡両県接地域言語地図集』では、「調査地点・調査対象者一覧」（p8）に「地点番号」が付されていて、山口県がわが「10.1～10.23」、福岡県がわが「20.1～20.20」となっている。

調査地点と調査地名とは、表1のとおりである。

この稿では、「地図Ⅱ」のように書きかえて、山口県がわに○を、福岡県がわに□の符号をあてて、その中に地点番号を入れた。できる限り、言語地図を単純化して方言事象の分布状況をつかみやすくするためである。

岡野は、『山口福岡両県接地域言語地図集』の終わりに、地図の製作・検討の過程での気づきを、「老年層図の方言事象分布について」(p 240~243)としてまとめている。「気づき」とは言いながら、調査の結果を確実に読み取り、地域のまとまりをつかむことができる。私は、この岡野の記述方式による説明に従いながら、言語地図に置きかえて見ていきたいと思う。一つの

地図Ⅱ

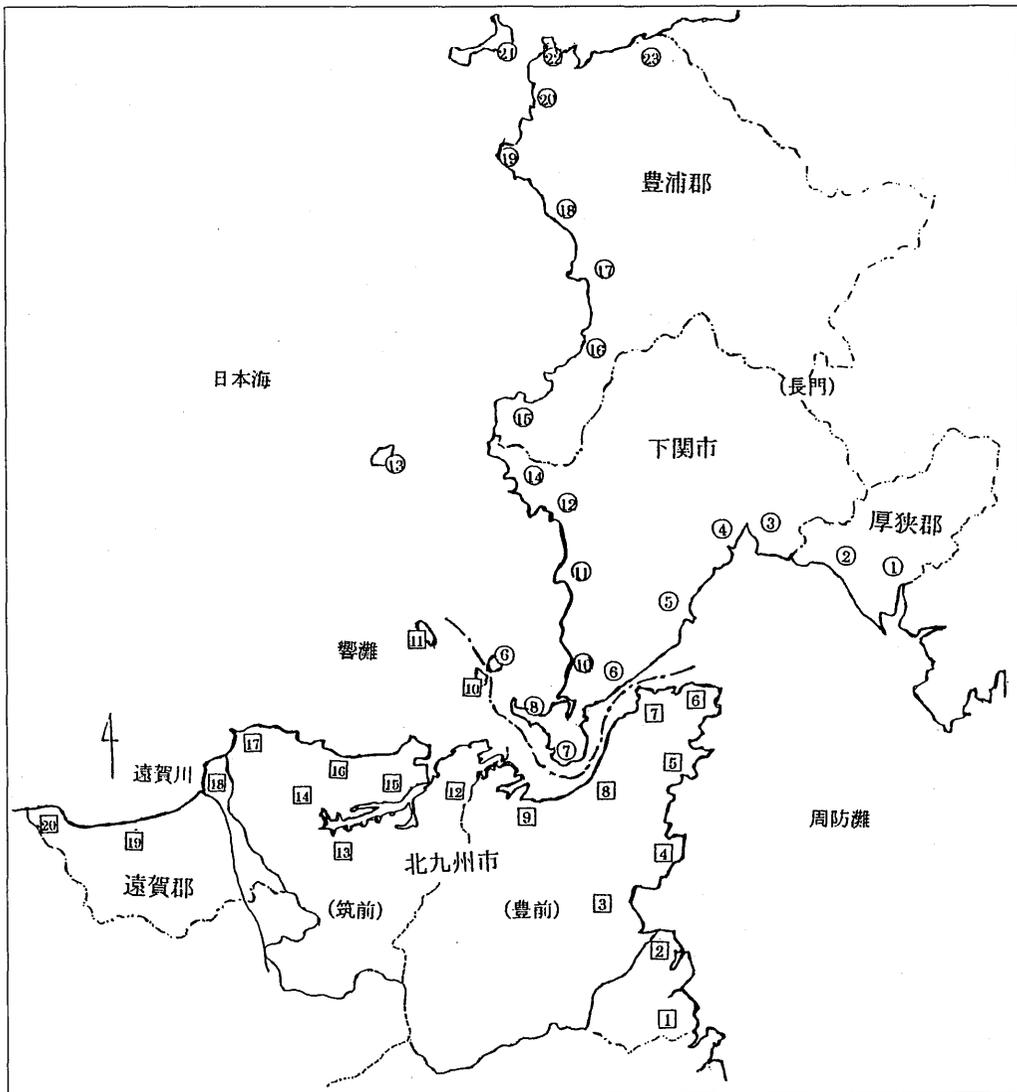


表 I

山 口 県			福 岡 県		
①	10.1	厚狭郡山陽町吉部田	①	20.1	京都郡苅田町二崎
②	10.2	厚狭郡山陽町津布田串	②	20.2	京都郡苅田町大字松山
③	10.3	下関市王喜町松屋	③	20.3	北九州市小倉南区葛原字足立
④	10.4	下関市宇部東町	④	20.4	北九州市門司区大字吉志
⑤	10.5	下関市長府松原町	⑤	20.5	北九州市門司区喜多久
⑥	10.6	下関市幸町	⑥	20.6	北九州市門司区青浜
⑦	10.7	下関市彦島田の首町	⑦	20.7	北九州市門司区田の浦
⑧	10.8	下関市彦島竹の子島	⑧	20.8	北九州市門司区大里本町
⑨	10.9	下関市六連島	⑨	20.9	北九州市小倉北区長浜
⑩	10.10	下関市大坪本町	⑩	20.10	北九州市小倉北区馬島
⑪	10.11	下関市安岡迫山	⑪	20.11	北九州市小倉北区藍島
⑫	10.12	下関市吉見里町	⑫	20.12	北九州市戸畑区天籟寺
⑬	10.13	下関市蓋井島	⑬	20.13	北九州市八幡西区陣原
⑭	10.14	下関市吉母字上	⑭	20.14	北九州市若松区大字頓田初日
⑮	10.15	豊浦郡豊浦町室津下	⑮	20.15	北九州市若松区古前
⑯	10.16	豊浦郡豊浦町大字小串入尾	⑯	20.16	北九州市若松区脇浦
⑰	10.17	豊浦郡豊浦町字賀湯玉在	⑰	20.17	北九州市若松区有毛新屋敷
⑱	10.18	豊浦郡豊北町北字賀二見	⑱	20.18	遠賀郡芦屋町西浜
⑲	10.19	豊浦郡豊北町神玉江尻下	⑲	20.19	遠賀郡岡垣町元松原
⑳	10.20	豊浦郡豊北町神田肥中	㉑	20.20	遠賀郡岡垣町湯川
㉑	10.21	豊浦郡角島			
㉒	10.22	豊浦郡豊北町神田島戸地方			
㉓	10.23	豊浦郡豊北町粟野小迫			

「ことば」の存立状況から、地域のまとまりの様相を、言語地図で、まず、一目でつかんでみたいからである。このために行った作業手順は、つぎのとおりである。

- ・岡野の「I 方言事象の分布状況」の分類項目を、私たちにもわかりやすくするために1～13までの順に提出する。
- ・1～13の項目の題目文も短くしている。
- ・岡野が記述している「方言事象の分布状況」の特色を見せるものの中から、さらに代表的なものを1項目から3項目ほど選び、それらを言語地図にし、[1]から[25]までの地図を作製した。
- ・「」の中は、『山口福岡両県接境地域言語地図集』の「地図番号」(老年層図)と「地図名」である。
- ・各地図の中のカタカナは、調査項目の方言事象である。
- ・(山)は、山口県域を示している。
- ・(福)は、福岡県域を示している。
- ・山口県がわの■・福岡県がわの●の符号は、調査地点にその事象が存立することを示す。

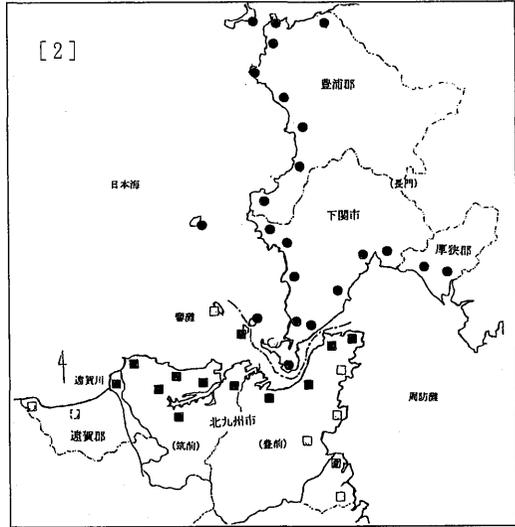
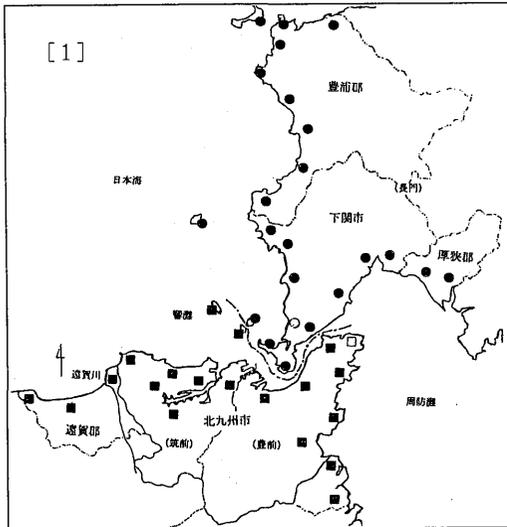
1 (山) 全域と(福) 全域とに分布する

[1] 「100 空腹である」

ヒモジー

[2] 「75 つわり」

ニューヤミ・ミューヤミ



[2] のニューヤミ類は、(福) 域の南西端には分布が見られない。

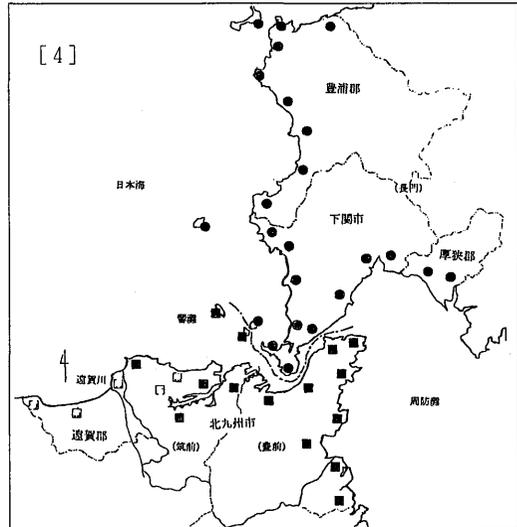
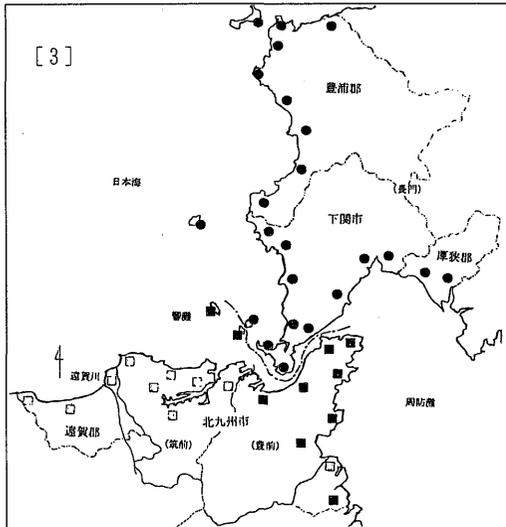
2.1 (山) 全域と(福) 豊前域とに分布する

[3] 「23 出ない」

デン

[4] 「93 ご飯の腐敗」

スエル



[4] のスエルは、(福) 豊前域の分布が、筑前東部域にまで広がっている。

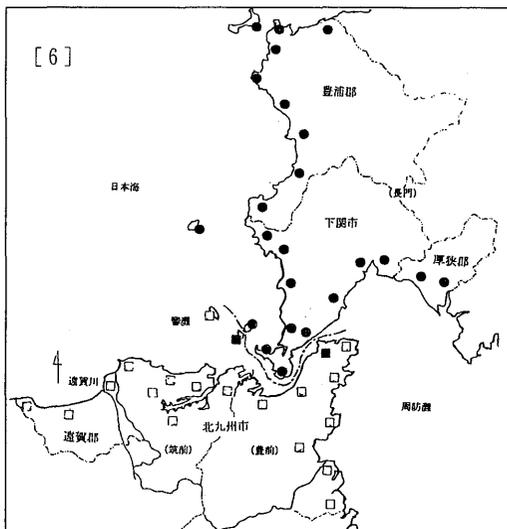
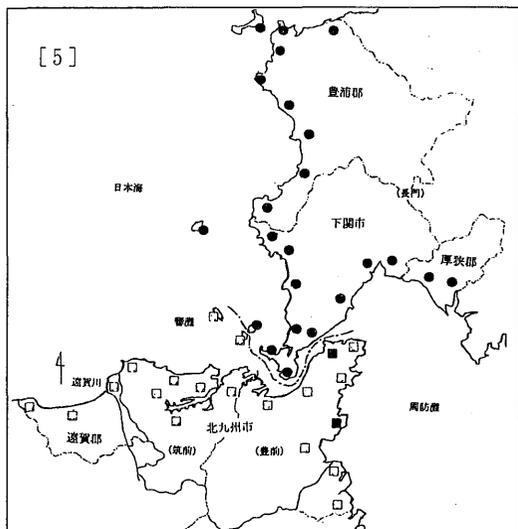
2.2 (山) 全域と(福) 企救半島とに分布する

[5] 「89 戸をしめる」

タテル

[6] 「92 だだをこねる」

ジラクル・ジラユー



[5] は、(福)豊前域の分布が、北部の企救半島に限られている事例である。

[6] は、(福)豊前域の分布が、東北端の北九州市門司区に限られている事例である。

3 (山) 全域と(福) 筑前域とに分布する

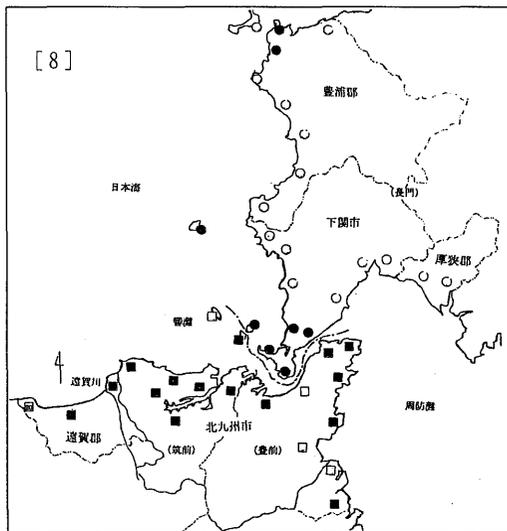
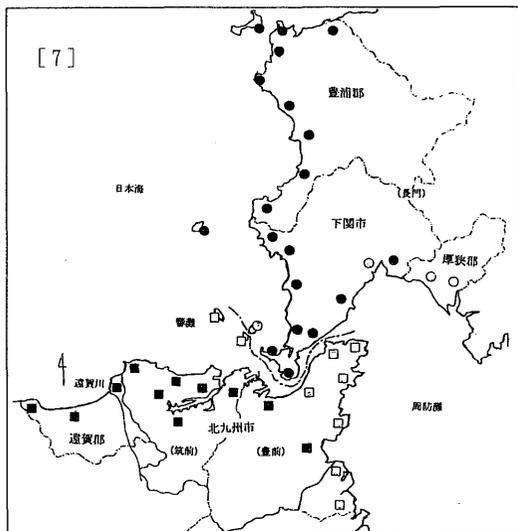
[7] 「94 ごぼうをそぐ」

フク

4 (山) 域日本海がわと(福) 全域に分布する

[8] 「82 ごはんの半煮え」

ゴッチン・ゴッチンメシ・ゴッチンゴハン・
ゴチゴハン



[7] のフクは、筑前域の分布と言えるが、豊前域の門司、小倉にも1・2点、見えている。

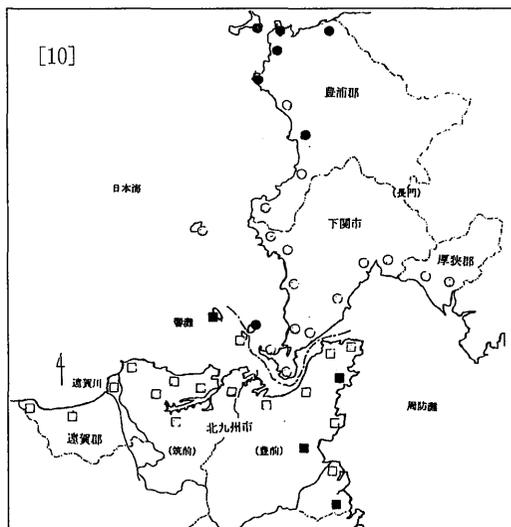
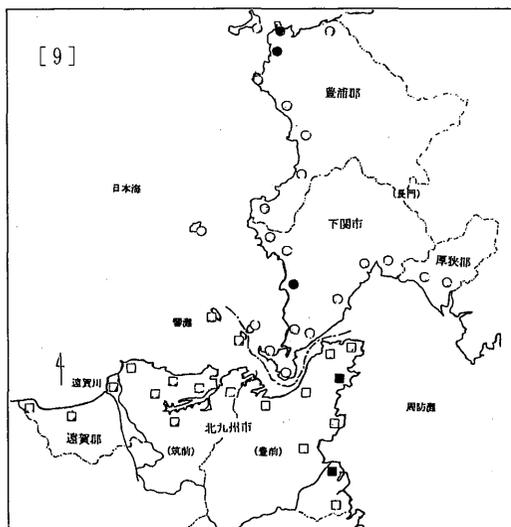
5 (山) 域日本海がわと(福) 豊前域とに分布する

[9] 「49 昨晚」

ユーヤ・ユンヤ

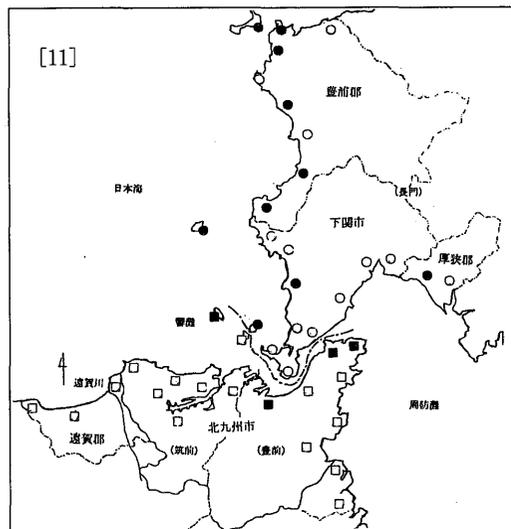
[10] 「56 仔牛」

ベベノコ・ベベンコ・ベベコ・ベーコ・ベッコ



[11] 「2 税金」

デイキン・デーキン



[9] のユーヤ、[10] のベベノコ類は、おおむね分布勢力が弱い事象である。

[11] のデーキンは、さらに、豊前域の分布が、北部の企救半島に限られている事例である。

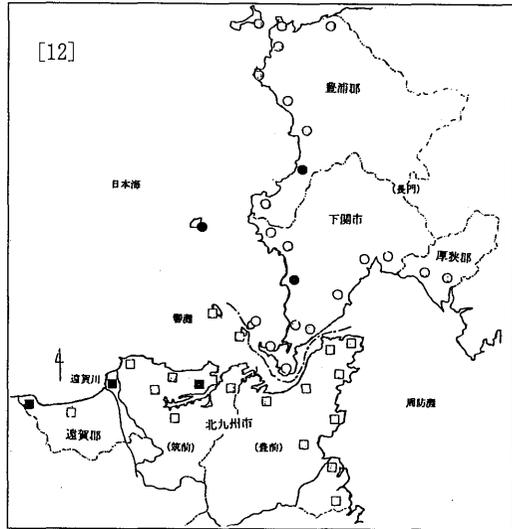
6 (山) 域日本海がわと(福) 筑前域とに分布する

[12] 「36 オクレとヤリー」

ヤリー・ヤンナサイ・

ヤレーヤ・ヤリナ・

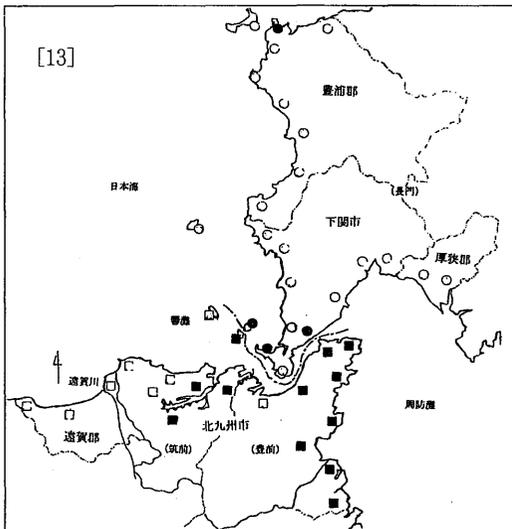
オヤリ・ヤランネ



7 (福) 域と(山) の南部・東部とに分布する

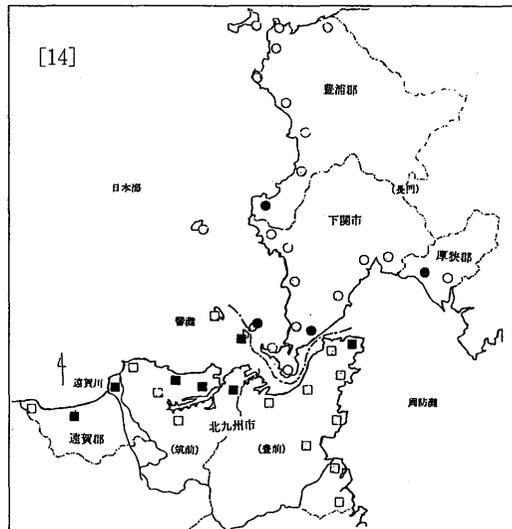
[13] 「86 両替する」

クズス



[14] 「26 するな(禁止表現)」

シタライケン・イケケン



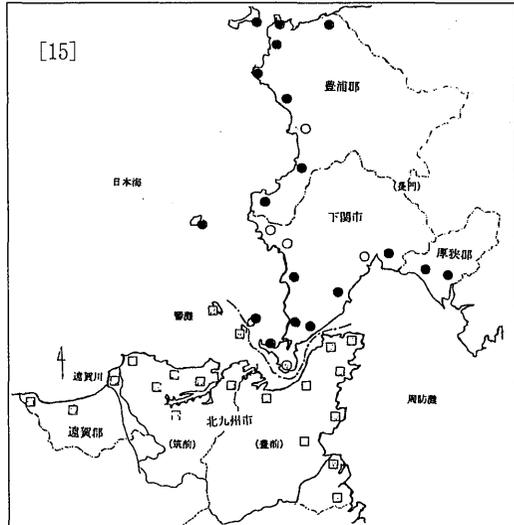
[13] のクズスは、筑前西部には分布していない。

[14] のシタライケン類の(福) 域の分布は、主に筑前域だけである。

8 (山) 全域に分布する

[15] 「91 叱る」

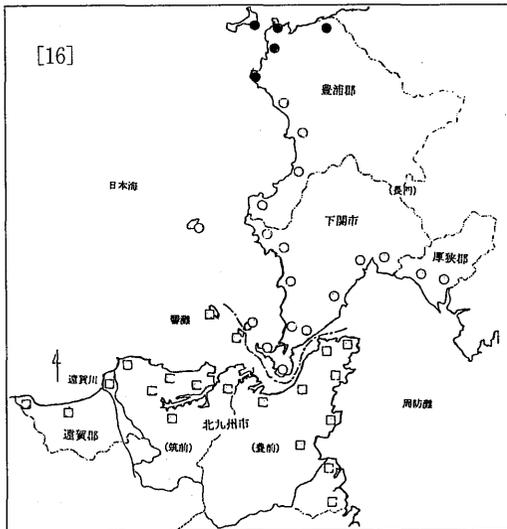
- クジオクル
- クジョークル
- クジュークル
- オークジオクル
- オークジョークル
- オークジュークル
- オークジクル



9 (山) 域日本海がわに分布する

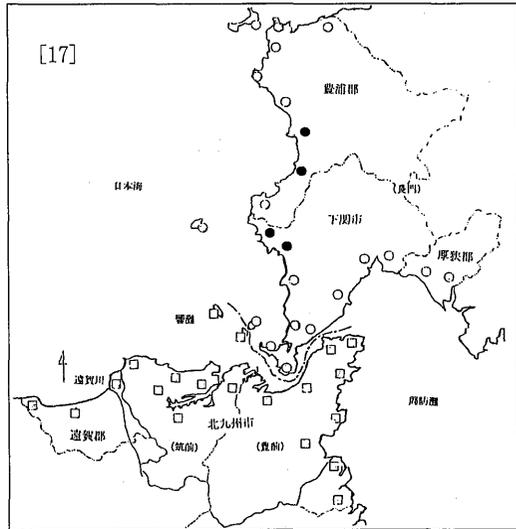
[16] 「104 たくさん」

ジョーニ・ジョーナコト



[17] 「103 非常に」

オモイデ・オモエデ



[17] のジョーニ類は、(山) 日本海がわの北部域に分布が限られている事例である。

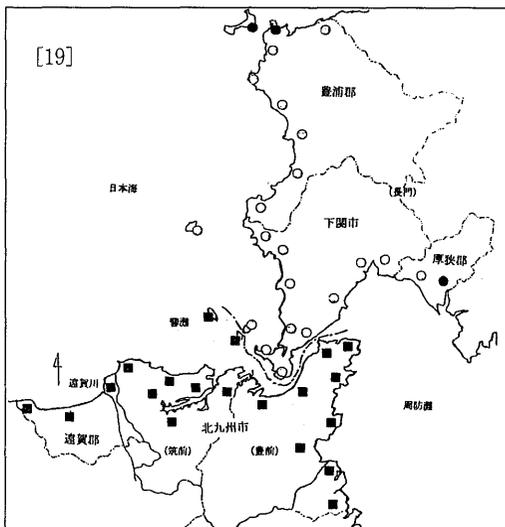
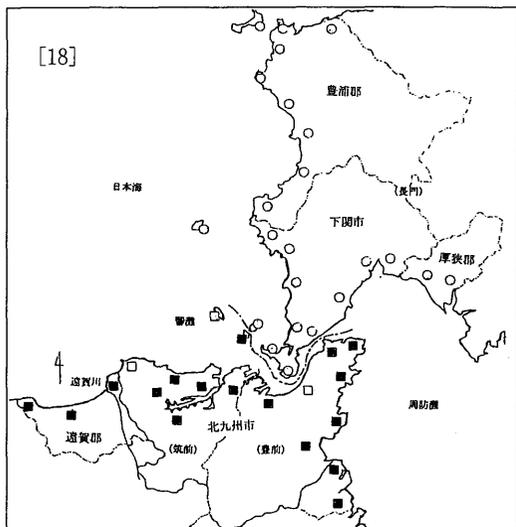
10 (福) 全域に分布する

[18] 「89 戸をしめる」

セク

[19] 「103 非常に」

タイソー・ターイソー



[19] のタイソー類は、(山) 域の3地にも分布が見えている。

11 (福) 豊前域に分布する

[20] 「85 寄附金を集める」

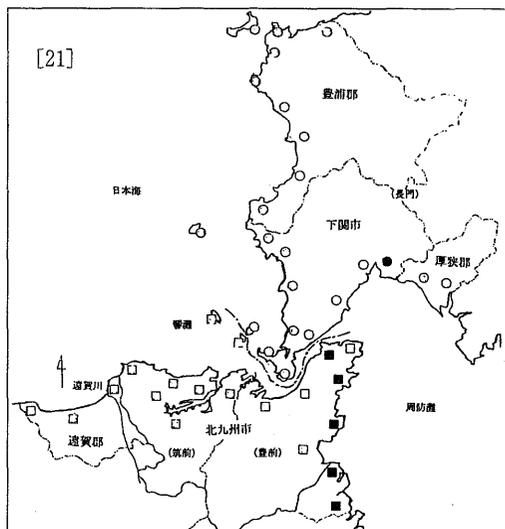
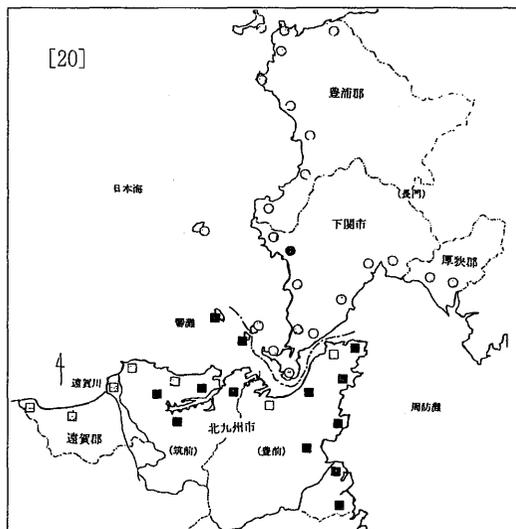
キル

[21] 「66 共有」

ヨリアイ・ヨリヤウ

ヨリオート ツカウ・ヨリヨーテ ツカウ

ヨリアッテ ツカウ

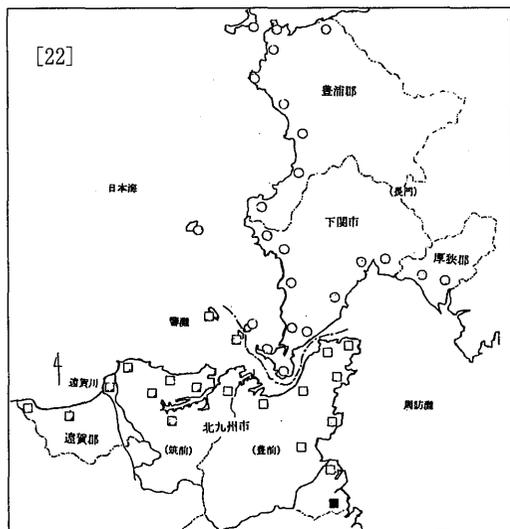


[20] のキルは、筑前東部域にまで分布している。

[21] のヨリアイ類は、周防灘沿岸域に分布している。

[22] 「68 怠け者」

ゴテクサリ・ゴテシン

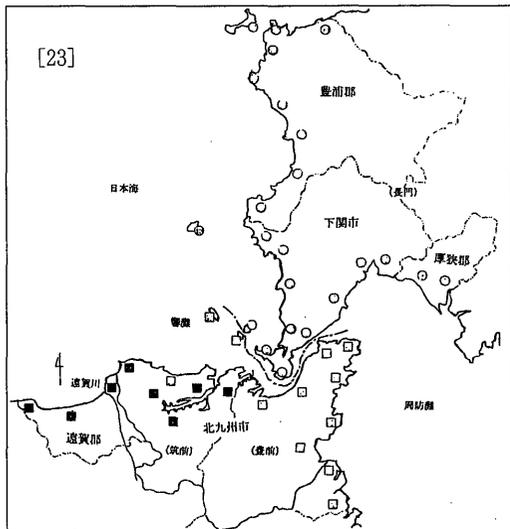


[22] のゴテクサリ類は、豊前域の南部の京都郡だけに分布が見える事例である。

12 (福) 筑前域に分布する

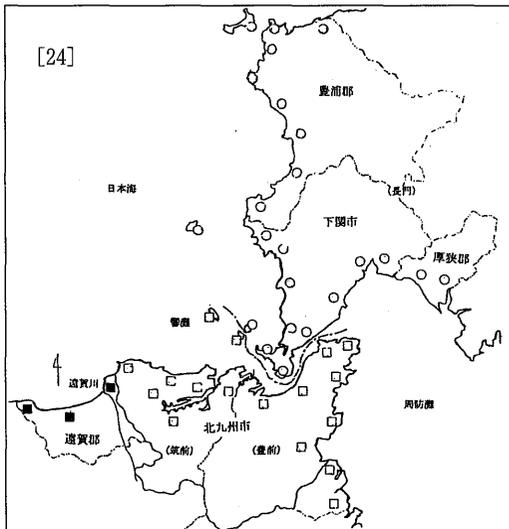
[23] 「43 ト・ソ・ホ・ン (文末詞)」

ト



[24] 「29 よい天気だ」

ヨカ



[24] のヨカは、筑前西部域の遠賀郡にのみ分布が見えている。

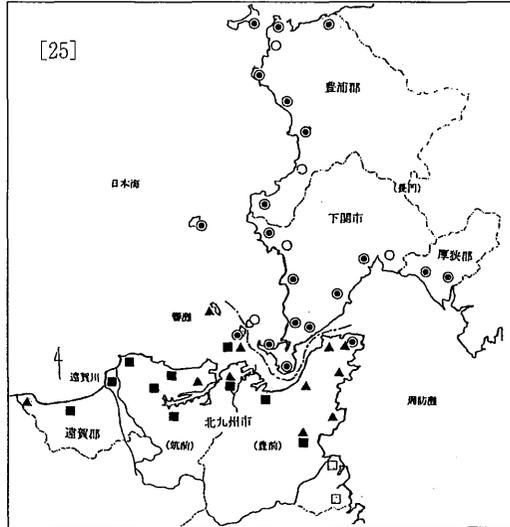
13 (山)域と(福)豊前域と(福)筑前域とに
対立して分布する

[25] 「81 たきこみごはん」

この地図は、これまでの[1]から[24]
までの地図とは符号を変えている。

- カヤクゴハン・カヤクメシ
- ▲ シオケゴハン・シオケメシ
- アジツケゴハン・アジゴハン
アジメシ

岡野によると、このような分布相を見せる
事象は少ないという。



関門海峡の東の周防灘(瀬戸内海)が、西の響灘(日本海)が、そして北九州工業地帯の真ん中の洞海湾もまた、この地域社会の形成に深くかかわってきたものと思われる。人々の暮らしのことばの存立状況が、関門海峡をまたぐ両地域のまとまりというものを感じさせてくれる。これまでに見てきた言語地図での用例を、繰り返して整理してみると、つぎのような幾通りかの様相を見て取ることができる。

- 1 (山)全域と(福)全域とに分布する
- 2 (山)全域と(福)豊前域とに分布する
- 3 (山)全域と(福)筑前域とに分布する
- 4 (山)域日本海がわと(福)全域とに分布する
- 5 (山)域日本海がわと(福)豊前域とに分布する
- 6 (山)域日本海がわと(福)筑前域とに分布する
- 7 (山)域の南部・東部と(福)域とに分布する

いっぽう、つぎのような状況を見せて、山口県の下関市から、または福岡県の北九州市から関門海峡を渡らないことばもあることがわかる。

- 8 (山)全域に分布する
- 9 (山)日本海がわに分布する
- 10 (福)全域に分布する
- 11 (福)豊前域に分布する
- 12 (福)筑前域に分布する
- 13 (山)域と(福)豊前域と(福)筑前域とに対立して分布する

おわりに

いったい、これから関門海峡一帯の地域社会は、どのようにまとまっていくのだろうか。

これから先、関門海峡の対岸の両域は、さらに周辺地域をもとりこんで、その一体性のようなものも大きく変化していくに違いない。平成8年3月には、「北九州港響灘環黄海圏ハブポート構想」が策定され、その全体構想目標年次は、2020年（平成32年）となっている。周防灘の海上には、新北九州空港が開設され、平成17年10月に開港の予定である。（『市勢概要 北九州』平成13年12月 北九州市）

私は、学生時代に、この『山口福岡両県接地域言語地図集』の製作に携わった者である。岡野は、『下関市・北九州市言語地図』の「はじめに」に、つぎのように記している。

つねづね、「この地域の生活語状況を明らかにすることは、ここで言語を学ぶ者たちの責任」と、学生たちを誘ってもきた。

当時、関門海峡を往来していた私も、この岡野の熱意に動かされ、叱咤激励されて導かれていたのである。宮本登もまた、『関門海峡周辺方言地図』の「序」に、

わたくしは、^{かんもん}関門海峡を眼前にみる、^{きたきゅうしゅうしもしくたのうらたちの}北九州市門司区田野浦太刀浦に生まれ、その地方語の中で育った。国語の研究として方言に志したわたくしは、愛着のある郷里の方言を研究対象とした。

と書いている。私の身のまわりには、今も、自分の生まれ育った地域のことばに関心を持つ若者たちがいる。

この項では、調査項目の方言について一つ一つを丁寧に見ていくことはできなかったが、現在、その作業は進行中である。つぎの二つの論文、

「関門域の方言動態——『下関市・北九州市言語地図』に見る——」

（岡野信子 1995 『日本文学研究 31号』）

「関門域の方言——下関市・北九州市言語地図に読む——」

（岡野信子 1999 『瀬戸内海環境言語学』 室山敏昭 藤原与一編 武蔵野書院）

も見合わせていく。

私は、先学のしごとに学びつつ、新たに、現代の関門海峡域の地域語の実態をつかんでいきたいと願っている。